

目次

I 研究指定校・指定地域の取組

- 伊勢崎市立名和小学校の取組 1
ともによりよく生きようとする児童の育成
－自分の思いや考えを伝え合う道徳の時間の工夫・改善を通して－
- 富岡市立南中学校の取組 9
多様な価値観を尊重し、よりよい生き方を追求する生徒の育成
－思いや考えを伝え合う指導方法の工夫－
- 県立渋川青翠高等学校の取組 17
信頼される社会人として活躍する力（「礼」「誠」「明」）の育成
- 藤岡市教育委員会の取組 25
道徳教育における小中一貫教育の推進

II 資料

- 教育課程の編成・実施状況調査（道徳）の概要 33
- 一部改正学習指導要領（小学校・中学校）（平成27年3月告示） 34
- 「特別の教科道徳」の実施に向けて、改正学習指導要領における小学校と中学校との相違点 47

I 指定校・指定地域の取組

○研究の概要（伊勢崎市立名和小学校の取組）

1 ともによりよく生きようとする児童の育成を目指した取組

- 他の教育活動との関連を図りながら道徳の時間を要として、児童が互いに自らの思いや考えを伝え合うことを重視した授業構想を取り入れた。
- 温かい学級づくりを目指し、児童が相互に認め合い支え合う環境や活動に取り組んだ。
- 学級経営との関連を図り、児童主体の学級会活動の授業の在り方を検討したり計画委員会を中心にした話し合い活動を充実したりして、学級活動の充実に取り組んだ。
- 毎月1回の「なかよしアンケート」を実施して児童理解に努めるとともに、人権教育の取組や講演等を行い、よりよい人間関係づくりに努めた。

2 自分の思いや考えを伝え合う道徳の時間の工夫・改善

- 道徳授業研究部会、調査・資料研究部会、特別活動・環境部会の3部会を組織し、全員で取り組む研修としての組織を位置付けた。
- 一人2授業の実践や代表授業による重点的研修、学年やブロックによる授業研究・検討を行い、実践を通しての研修に取り組んだ。
- 子どもの姿を基に、児童の実態を分析し、各ブロックごとに目指す児童像を設定したり学校全体で共有したりした。
- 授業改善や工夫の視点を基に教材研究を行ったり、資料分析図を用いて道徳的価値の自覚を深めるための発問や手立ての工夫をしたりして授業実践の充実を図った。
- 道徳教育全体計画や全体計画の別葉、各学年の年間指導計画の改善を図るとともに、道徳コーナーを設置し授業実践を共有した。

3 他組織や家庭・地域との連携

- 保護者や地域ボランティアによる朝の読み聞かせ活動や、PTA本部役員を中心にした保護者による大型紙芝居の鑑賞会を実施し、保護者等との触れ合いを通して豊かな心の育成に努めた。
- 生徒指導部会および教育相談部会の活動を活性化し、学習生活相談員やスクールカウンセラーとの連携を図りながら、学校全体で「きずなづくり」に努めた。

4 研究の成果

- 道徳の時間における伝え合う活動を様々な視点から取り組んだり工夫したりすることで、児童一人一人が自らの思いや考えをしっかりともち、それを友達に伝えたり、友達の考えを聞きながら自らの考えを振り返ったりして、自らの思いや考えを互いに深めたり高めたりすることができた。
- 一人2授業の実践に取り組み、子どもの姿を基にしたブロック部会での授業研究会を重ねて授業検討をすることで、子どもの姿をしっかりと見取り、道徳の時間の改善や工夫につなげることができた。
- 道徳教育全体計画の別葉を職員室内に掲示し、実践を基に改善や修正を図ったことで、学校全体の教育活動と関連付けて道徳の時間を考えることができた。また、道徳の授業を通して学んだ価値と結び付けて日常での指導に生かしたり子どもを称賛したりすることができた。

伊勢崎市立名和小学校の研究内容

1 学校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数
いせさきしりつなわしょうがっこう 伊勢崎市立名和小学校	伊勢崎市堀口町502-1	0270-32-0072	476人

2 研究課題

ともによりよく生きようとする児童の育成
 - 自分の思いや考えを伝え合う道徳の時間の工夫・改善を通して -

3 研究課題の設定理由

本校の今までの研究では、国語や算数などの様々な教科において、言語力の身に付いた児童の育成を目指し、「学び合い活動」に焦点をあててきた。そして、自分の考えを伝えたり、友達の考えをしっかりと聞き、自分とは違った考えに触れたりすることで、自らの考えを深めたり高めたりしていけるよう努めてきた。今後、平成30年度において、道徳の時間が特別の教科として全面実施され、学校教育における道徳教育の役割はさらに高まるものと考えられる。そこで、今年度はこれまでの研究を継承しながら、学校における道徳教育を、より一層道徳の時間を要として教育活動全体を通じて行っていく。道徳の時間においても、本時のねらいの達成に向けて、互いの考えを伝え合う活動を効果的に展開し、道徳的価値の自覚を深める指導に重点をおいて研究を進めていくこととした。

本校の児童は、祖父母を含めた地域のお年寄りや家族に見守られて育ってきた、明るく素直な児童が多い。また、困っている友達や下級生に優しく声をかけたり、花壇の花や教材園の野菜を大切に育てたりと、思いやりの気持ちをもって、元気に学校生活を送っている。しかし、道徳的価値を捉える際、これまでの生活経験や学習経験を基に、感じ方や考え方に根拠をもったり、自分との関わりで考えを深めたりするまでには至っていない。また、友達の感じ方や考えを生かして、新たな考えを取り入れたり、これまでの考えを捉え直したりすることについても十分とはいえない。さらに、理解した道徳的価値について、日常生活に生かし切れない姿も見られる。

そこで、他の教育活動との関連を図りながら道徳の時間を要として、児童が互いに自らの思いや考えを伝え合うことで、これまでの自らの思いや考えを深めるとともに見つめ直し、よりよく生きようとする意欲や態度をもてるようにすることが大切だと考える。

以上のことから、道徳の時間において、自分の思いや考えを伝え合う活動を工夫・改善することを通して、自分の考えを深めたり高めたりし、ともによりよく生きようとする児童の育成を図ることができると考え、本主題を設定した。

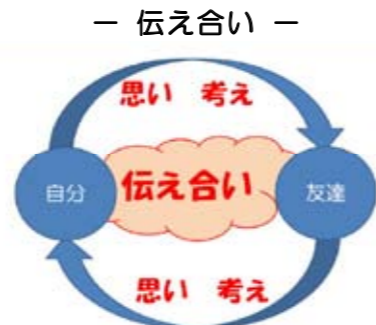
4 研究の概要

(1) 研究のねらい

道徳の時間において、児童一人一人が、自分の思いや考えを伝え合うことにより、自分の考えを深めたり高めたりして、ともによりよく生きようとする児童を育成する。

(2) 研究仮説

道徳の時間において、自分の思いや考えを伝え合う活動を工夫することによって、児童は、自分の考えをもつとともに、他者の思いや考えにふれ、自分の考えを深めたり高めたりして、他者とともこれからの自分の生き方をさらによいものにしようと努力することができるであろう。



(3) 研究の内容

自らの思いや考えを伝え合うことができるよう、道徳の時間の工夫・改善として、活動や資料、発問、板書、ワークシート、教材・教具等を視点として取り上げた。この視点を基に授業を構想したり検討したりして目指す児童像の実現に向けて授業実践に取り組んできた。

授業構想では、授業者が指導観（価値観・児童観・資料観）を明らかにし、ねらいとする道徳的価値を考えたり整理したりして授業を具体化した。また、資料分析図を用いて、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めるために、道徳的な価値理解や人間理解、他者理解、自己理解という観点から、授業において予想される子どもたちの姿や変容を想起しながら授業者の意図を明らかにした発問構成を考えた。

そして、授業構想と授業実践、授業研究会を繰り返し、道徳の時間において子どもたちが自らの思いや考えを互いに伝え合うことができていたかを検証した。

(4) 各部会の取組

道徳授業研究部会、調査・資料研究部会、特別活動・環境部会の3部会と低・中・高学年ブロックを関連させ、全員で取り組む研修として組織を位置付けた。

① 道徳授業研究部の取組

授業改善や工夫の視点を基に、各学年・ブロックで授業実践と授業研究会を重ねていく。また、子どもたちの姿から授業の効果や改善点を話し合い、よりよい授業を目指して取り組んできた。

○ 低学年ブロック

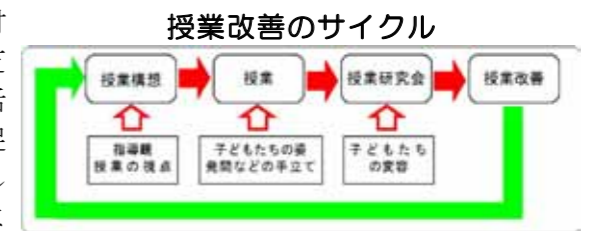
「指導観を基にした資料の活用・工夫」や「考えを分かりやすく伝えられる教材・教具の工夫」の視点から、資料を紙芝居にして提示したり、ペープサートを活用したりすることで、低学年の実態を捉え、子どもたちがじっくりと資料に親しみながら自分との関わりで考えられるようになるとともに、道徳的価値の自覚を深めることにつながった。

○ 中学年ブロック

「指導観を基にした資料の活用・工夫」「ねらいを達成できる発問の工夫と構成」「考えを表出できるワークシートの工夫」「考えを分かりやすく伝えられる教材・教具の工夫」を視点として、中心発問と補助発問を系統的に考えたり、教具やワークシートを工夫したり、資料の提示を工夫したりすることで、自らの考えをしっかりと友達に伝えたり、深めたりするとともに、今考えるべき主人公の心情を捉え、



資料分析図（2年「ぐみの木と小とり」）



自分ごととして考えられることにつながった。

○ 高学年ブロック

「指導観を基にした資料の活用・工夫」「ねらいを達成できる発問の工夫と構成」「考えを分かりやすく伝えられる教材・教具の工夫」を視点として、ねらいを明確にした資料を活用したり、発問の系統を考えたり、主人公の表情図などの教具を工夫したりすることで、子どもたちの実態や教師のねらいを明確にした意図的な授業につながった。

② 調査・資料研究部の取組

○ 実態調査

年度始めの道徳性検査と年3回の道徳の時間のアンケートを実施した。学級における児童の実態を考える上での手がかりにしたり学級経営に生かしたりすることができた。さらに、道徳の時間の授業においても、学級の課題や目標、児童の実態を関連して生かし、授業の改善や工夫に役立ててきた。

○ 全体計画の別業を作成

学校教育全体の中で道徳教育を進める上で、全体計画の別業を作成し、その中に「わたしたちの道徳と「ぐんまの道徳」との関連を位置付けた。

さらに、道徳の時間の主題やねらいを具体化し、道徳の時間と行事や他教科との関連を考え、補充・深化・統合という視点で修正を行った。また、別業を学年ごとに職員室に掲示し、道徳の時間や他の教科の授業実践を踏まえて、補充・深化・統合の関連や効果の有無を確認したり修正したりしてきた。

○ 実践例の活用

各学年の授業実践を学校全体で共有できるように、実践を視覚化できる道徳コーナーを設置した。このことで、各学年で行った授業実践をブロックで共有したり他ブロックの実践に生かすことができるのと同時に、子どもたちも実際に目にできる場を整えることにつながった。

③ 特別活動・環境部の取組

○ 美化活動

5・6年生の美化委員が中心となり、緑の少年団の活動の一環として、「花いっぱい」の活動として学校の花壇の整備や、学校全体で校庭や花壇をきれいにする環境集会を行っている。このことから、自分たちの学校を自分たちできれいにしていこうとする思いをもち、学校への愛着心を高めることにつながった。

○ 縦割り活動の充実

6年生を中心に金曜日の朝の時間を利用し、6年生が活動の計画を立て、1年生から6年生が遊び等を通して一緒に関わることができる活動を実施している。このことから下級生への関わりが増え、様々な場面でつながりをもつことができた。

○ 児童会によるあいさつ運動

代表委員会や生活委員会を中心にあいさつ運動を実施している。学校を支える高学年が中心となりあいさつを実践することで、低・中学年の児童のあいさつの模範として、互いにあいさつを交わし合う心のつながりをもつことができた。

○ 温かい学級づくりと学級活動の充実

児童が相互に認め合い支え合う学級づくりに努めるとともに、学級経営との関連を図り、計画委員を中心にした話し合い活動や児童主体の学級活動の充実を図ってい

研究組織図



別業の掲示



道徳コーナー



る。このことで、学級における係や当番など主体的に関わる児童が多くなってきた。

④ 他組織や家庭・地域との連携

○ よりよい人間関係づくりへの連携

生徒指導部会および教育相談部会の活動を活性化し、学習生活相談員やスクールカウンセラーとの連携を図り、学校全体で情報を共有し合い、「きずなづくり」に努めている。

○ 読み聞かせ・大型紙芝居

保護者による朝活動での読み聞かせ活動や大型紙芝居を実施している。本を介して保護者と触れ合う機会を生み、本の楽しさや素晴らしさを伝えてもらっている。

○ 保護者への授業公開

授業参観や学校公開日等を利用して道徳の授業公開を行ったり、通信等を活用して道徳の授業の様子を伝えたりしている。学校評価等の結果から、道徳の授業が「子どもたちの心を育てている」と考える保護者の割合が高くなってきている。

5 実践研究事例

「明確な指導観」をもって構想した道徳の授業（第2学年）

- (1) 主題名 「温かい心を届けよう」 2- (2) 思いやり・親切
資料名 「ぐみの木と小とり」(出典 「ゆたかなこころ」 光文書院)

(2) 明確な指導観

① 価値観

児童の人格形成の基盤は、人と関わる力にあると言ってよい。様々な人と関わり、温かく豊かな人間関係を築いていく力は、児童にとって大切な力だと考える。幼い頃から人を大切に、温かい気持ちで接していく習慣を身に付けていくことが、一人一人の児童の人と関わる力を育み、ひいては温かい社会の形成につながっていく。そのため、身近な人に親切にすることは小学校低学年から特に大切にしたい資質であり、それを学校生活で育んでいくことは大変意義深いことと考える。

この時期の児童は、社会体験が少しずつ積み重ねられてきた段階で、家族や仲のよい友達には思いやりの気持ちや親切な行為を素直に表すことができるようになってきている。そこで、親切にすることのよさだけでなく、難しさにも着目し、考えさせる活動を通して、価値理解と共に人間理解も図ってきたい。

② 児童観

生活科「町探検」や「1年生と仲良し」の学習で、地域の人や1年生と関わる体験をしている。国語科「スイミー」「うれしいことば」の学習では、友達のために考え、行動することのよさや人をうれしい気持ちにさせる言葉について学んできている。このような親切に関する様々な学習や体験を通して、児童は、思いやりの気持ちは育ってきているものの、親切にすることの大切さについてじっくり考え、深めることができているとは言えない。そこで本時では、親切にすることの困難さに着目させながら、価値理解を図っていく。そして、困っている人などに温かい心で接し、親切にすることのよさと難しさを自分との関わりで考えさせながら、道徳的価値観の深まりを図っていく。

③ 資料観

ある日、ぐみの木にお腹をすかせた小鳥がやってきた。小鳥は、ぐみの木に実をもらう。そこで、毎日来ていたりすがこの頃来なくなったことを心配したぐみの木が、小鳥にりすのことを相談する。小鳥は、ぐみの実を持ってりすの様子を見に行くと、りすは病気で寝ていたが、ぐみの実を食べて少し元気になる。小鳥は次の日も届ける約束をするが、嵐になってしまい、小鳥は迷った末、嵐の中をぐみの実を持ってりすの所へ向かうという内容である。

嵐という困難な状況の中では、小鳥はりすのことを思って飛び立とうとする気持ちと、嵐がこわい、行きたくないという様々な気持ちが交錯する。この小鳥の葛藤

する気持ちに十分共感させることで、親切に対する多様な感じ方や考え方を児童から十分引き出させたい。そして、親切にすることのよさと難しさを考えさせる活動を通して、価値理解や人間理解を含めた他者理解を図っていく。小鳥の行動を通して、自分との関わりが少ない人であっても、困っている人や弱い立場の人がいたら思いやりをもって、温かい心で接し、親切にすることの大切さに気付かせることのできる資料であると考えた。

④ 展開の概要

時間	学習活動・主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
5分	1. 「親切の木」の掲示物を見て、親切とはどういうことか発表する。 (親切にするってどういうことでしょうか?) ・助けてあげること ・貸してあげること ・やさしく教えてあげること	・「親切」に対するイメージを問うことで、ねらいとする価値への方向付けをする。
25分	2. 資料「ぐみの木と小とり」を読んで話し合う。 (1) ぐみの木からりすのことを相談されたときの小鳥の気持ちを考える。【価値理解】【他者理解】【人間理解】 ・りすさん、どうしたんだろう。 ・ぼくが代わりに行ってあげようかな。 (2) 少し元気になってきたりすを見た小鳥の気持ちを考える。【価値理解】【他者理解】 ・喜んでもらえてうれしい。・明日も届けてあげたいな。 (3) 嵐の音をじっと聞いて考えている小鳥の気持ちについて考える。【価値理解】【他者理解】【人間理解】 ・この嵐では、絶対に無理だ。 ・どうしよう。行きたいけど、この嵐では無理かな。 ・りすさんと約束したから行かなくちゃ。 ・りすさんのためにも、ぐみの木さんのために何とかしてぐみの実を届けなくちゃ。	・パネルシアター風に資料提示を行ったり、嵐の効果音を流し、臨場感を出したりすることで、道徳的価値に関わる場面や状況についての理解を深められるようにする。 ・友達でないりすのために自分ができることをしてあげたいと思っている小鳥の気持ちに共感させる。 ・葛藤が生じる小鳥の二つの自我を推定して役割演技をさせることにより、児童が自分との関わりの中で考えることができるようにする。
15分	3. これまでの自分を振り返る。 (4) 親切にできなかったことをワークシートに書く。 【人間理解】【自己理解】 ・1年生と流れるプールをした時、自分が泳ぎたかったから、手をつないであげるのを忘れてしまった。 ・転んだ子がいたけど、急いでいたから声をかけてあげられなかった。 4. 1年生からのお礼の手紙を読む。 【価値理解】【自己理解】	・板書をもとに本時を振り返り自分との関わりの中で親切な行為について自覚させる。 ・1年生からの手紙を読むことで自己肯定感と実践への意欲を高められるようにする。

(3) 授業記録 (T: 教師 C: 児童)

T: 小鳥さんは、嵐の中、りすさんのところへぐみの実を届けに行くのだけれど、いろいろなことを考えただろうね。ずいぶん迷ったと思うよ。どんなことを迷ったんだろうね。(中心発問)

「行けないと思っている小鳥」「行こうと思っている小鳥」という葛藤が生じる

二つの自我を推定し、2人の児童にそれぞれを演じさせる役割演技を設定した。

T: これ(小鳥のお面と「行けない」「行こう」のカード)をつけたらC1さんは、りすの家にぐみの実を届けに行こうと思っている小鳥、C2さんは、行けないと思っている小鳥です。

(観衆の子どもへの指示)

見ている人は、自分が小鳥だったらどうかを考えながら見て下さい。それでは始めましょう。

(即興的な演技)

C1: 外は嵐だけれど、りすさんが病気で寝ているから私が届けてあげなくちゃ。

C2: だって、こんなにひどい嵐だもの、行けないよ。

C1: でも、りすさんが待っているから。りすさんのために、絶対に届けてあげたいよ。

C2: でもさあ、嵐が怖いし、明日行けばいいんじゃないかな。

C1: だめだよ。りすさんと約束したから、待っているよ。

C2: でも、ぼくはこの嵐では無理だと思うな。

T: (演技の中断と話し合い) はい、そこまでです。それでは、見ていた人たち、小鳥の心の中はどうだったかな。



りすさんの所へ行ってあげたいけど嵐は怖いし・・・やっぱり私は、迷って迷って迷っちゃいます。



りすさんが病気で、絶対に行ってあげたいなあ。でも、嵐で翼が折れちゃいそうなんだよなあ・・・。

T: 小鳥の心の中は、迷って迷っちゃってるんだね。それでは今度は、役を交代します。

(「行けない」「行こう」のカードを交換して、再び演技する。)

(役割交代演技後)
それでは、C1さんは〇〇さんに、C2さんは△△さんにもどってもらいます。
(カードとお面を外す)
小鳥になってどんなことを思いましたか?
(〇〇と△△は個人名)



ぼくは、最初絶対ぐみの実を届けると思っていたけど、なんだか迷ってきました。

嵐だけれど、りすさんのために行こうと思った小鳥の気持ちはよく分かりました。でも、私だったら行けるか分からないと思いました。

(4) 考察

① 資料提示の工夫

○ 小鳥のさえずりや嵐の効果音などを適切な場面に取り入れていた。これにより、児童は臨場感をもってお話の中に引き込まれていき、ストーリーを容易に把握することができた。



パネルシアターを活用した資料提示



お話に引き込まれていく様子

○ 黒板を舞台にしたパネルシアター風に資料提示を活用し、小鳥を動かしながら示すことで、児童の興味・関心を高めたり、登場人物に親しみをもたせたりすることができた。それは、児童が自分との関わりの中でねらいとする道徳的価値について

考えられるようにするための有効な手立てとなっていた。

② 役割演技を活用した自分との関わりの中で考えられる話し合い活動

- 葛藤が生じる小鳥の二つの自我を推定して即興的な役割演技をさせることにより、児童は、自分自身の考え方を問われることになり、自分のこれまでの体験に基づいたやり取りとなっていた。



- 役割交代をすることにより、一人の子どもが異なった立場で役割演技を行うことができ、自分と異なる立場や思い、多様な感じ方、考え方に会うことで他者理解・価値理解を深めることができた。
- 役割演技の際、観衆となる児童に演技を見る視点を明確に示したことにより、演技をしている児童だけでなく、全員が参加している役割演技となっていた。また、演技後、観衆の児童と演技している児童が話し合うことで、価値理解・他者理解・人間理解を深めることができた。

③ 自分ごととして考えられる振り返り活動

- 「親切にできなかったこと」を振り返らせることで、単なる道徳的価値の大切さを理解させるだけでなく、人間理解や他者理解も視野に入れた学習としていた。このことにより、児童が現在の自分自身に目を向け、道徳的価値観を深めることにつながっていた。
- 「親切にしてもらってうれしかった」という1年生からの手紙を読むことで、自己肯定感や実践への意欲の高まりを育むことができていた。また、相手意識をもたせることができた。

6 研究の成果および課題

(1) 研究の成果

- 道徳の時間における伝え合う活動を様々な視点から取り組んだり工夫したりすることで、児童一人一人が自らの思いや考えをしっかりともち、それを友達に伝えたり、友達の考えを聞きながら自らの考えを振り返ったりして、自らの思いや考えを深めたり高めたりすることができた。
- 一人2授業の実践に取り組み、子どもの姿を基にしたブロック部会での授業研究会を重ねて検討することで、子どもの姿をしっかりと見取り、道徳の時間の改善や工夫につなげることができた。
- 道徳教育全体計画の別葉を職員室内に掲示し、実践したことを明確にして改善や修正を図ったことで、学校全体の教育活動と関連付けて道徳の時間を考えることができた。また、道徳の授業を通して学んだ価値と結び付けて日常での指導に生かしたり子どもを称賛したりすることができた。

(2) 今後の課題

- 子どもたちが自分ごととして考えられるよう、自ら考え振り返る場を工夫したり、予想される児童の反応と発問を結び付け、補足発問を準備したりする必要がある。
- 友達の考えを基に、自らの考えを述べたり伝えたりすることまでには至らなかった。思いや考えたことを伝え合える話し合い活動の内容や視点を工夫したり、場の位置付けを考えたりしながら授業構想をする必要がある。

7 参照できるホームページ

<http://www.isesaki-school.ed.jp/nawasyo/> (伊勢崎市立名和小学校)

○研究の概要（富岡市立南中学校の取組）

1 学校教育全体で行う道徳教育の推進

- 本校生徒の実態から、一層伸ばしたい道徳性として、「向上心・個性の伸長」「思いやり・感謝」「よりよい学校生活・集団生活の充実」「生命の尊さ」を重点指導内容項目とし、全体計画の中に位置付けて実施した。
- 道徳の年間指導計画を、教科等学校教育活動全体との関連を図りながら見直すとともに、全体計画の別葉を作成し、これを活用して「補充」「深化」「統合」のいずれかに位置づけた道徳の指導案のもと授業を行った。
- 授業で学習した内容を日常生活の中で振り返り、日常的な自覚につながるように、各学年の道徳の授業で行った内容や生徒の感想等をまとめたものを廊下壁面に掲示した。また、授業で使った読み物等の資料と生徒の書いたワークシートをそれぞれ別々のファイルに綴じて保管することで、授業の内容や生徒の内面の変容を見取り、評価への活用を図った。

2 授業改善（思いや考えを伝え合う指導方法の工夫）

- 要請訪問や講師を招いた月1回程度の公開授業及び全職員による研究授業において、指導案の形式を統一し指導観（価値観・生徒観・資料観）を明確にした授業を行った。
- 「ねらい」→「中心発問」→「中心発問に導く発問」の順に授業構成を考え、価値を焦点化し、資料の内容に沿った価値の追求を通して理解を深めることを共通理解した上で実践に臨むこととした。
- 中心となる授業の形態が「教師の発問→生徒の発言」の繰り返しの形式から、「生徒の発言→生徒の発言」と形式を工夫し、生徒相互の伝え合う場への移行に努めた。
- 授業の中で生徒が互いの思いや考えを伝え合うための手立てとして、学級全体、グループ・ペアでの話し合い、カード等による意思表示の視覚化、座席の形態等の様々な工夫を指導案に明示して、授業を行った。
- 研究授業と研究会で話し合われた改善点等を「研修だより」にまとめて全員で共有化を図り、以後の道徳授業に生かすことで「伝え合う」活動の質的向上を図った。

3 家庭との連携

- 本校独自に毎月19日を家庭における「道徳の日」と定め、その日に合わせて道徳通信「Myハート通信」を発行した。その中で、日々の実践を紹介するとともに、毎月テーマを決めてそれに関する資料を「私たちの道徳」等から選んで提供し、親子で話題にする機会を設定し、道徳的意識の向上を図った。
- 学校と家庭が連携して道徳教育を推進していく道標を記した指標を共有化するため、本校の道徳教育の重点項目を中心にまとめた啓発リーフレットを保護者に配布した。
- 保護者対象の道徳教育に関するアンケートを年2回実施し、学校で行う道徳教育への理解を深めてもらうとともに、その結果をもとに家庭と連携した指導を行うための資料とした。

4 研究の成果

- 講師を招いての基礎研修と日々の授業実践、授業研究会の積み重ねにより、教師の授業構想力、伝え合う活動の工夫等の質的な向上が見られた。その結果、生徒が道徳授業に主体的、意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。
- 「伝え合う活動」を、道徳だけでなく教科の指導においても積極的に取り入れることで、生徒の発言への抵抗感が減り、自分の思いを少しずつ他人に伝えられる場面が増えてきている。同時に生徒の道徳的価値への関心の高まりも感じられ、学校全体に落ち着きが増してきた。
- 保護者に本校の道徳教育の取組に関する情報を積極的に伝えたり、授業を参観する機会を設定したりすることにより、保護者の道徳教育への関心と期待の高まりが見られ、授業や使った資料などについて家庭でも話題となる機会が増えた。さらに親子のコミュニケーションや、学校と家庭の信頼関係をより一層深めることにつながっている。